

# 元曲における戀愛と戦い

## はじめに

元曲（元雜劇・散曲）は、中國文學を代表する重要な文學ジャンルの一つであるが、詩や詞の研究と比すれば、その特質を考察する研究は寥々たるものである。とりわけ「閨怨詞」の連続ないし亞流とされる、戀愛を詠った散曲作品の表現上の特質については、先行研究ではいまだ十分な分析が行われていない。

たとえば、戦いを意識した「鶯花寨」という表現が、妓樓を表す語として、元曲に至り初めて現れる。これに類する語としては、他に「鶯花陣」や「花柳營」「錦陣花營」「錦營花陣」などが、散曲や雜劇における妓樓の描寫に頻見される。これとは別に、妓女との戀をめぐり、詩詞には見られない戦いの比喻を用いた描き方も、元曲の中で頻繁に見られる。元初から元末にかけて、この種の表現が大いに流行していたことが窺える。<sup>(1)</sup>

本論は戦いを比喻として用いる作品を扱い、妓女の戀愛を題材とした元曲から読み取れる戀愛に對する認識を分析し、そのような表現が用いられる所以と特徴について考えてみたい。

元曲における戀愛と戦い

陳 文輝

## 一 戦いの場と化した妓樓

まず、元代の代表的な散曲集『梨園按試樂府新聲』<sup>(2)</sup>（以下『樂府新聲』と稱す）卷中「滿庭芳」の條に収録される次の一曲をみてみよう。

枉垂柳青。貪食餓鬼、劫鏹妖精。爲幾文口含錢做死的和人競。動不動捨命亡生。向鳴珂巷里幽囚殺小卿。麗春園里迭配了雙生。鶯花寨埋伏的硬。但開旗決贏。誰敢共俺娘爭。

〔語注〕

- ・柳青—勾欄語。元曲によく見られる曲牌「柳青娘」の「歇後語」的な使い方。妓女のお母さん、すなわち妓樓の老鴇・義母（詳しくは注③参照）を指す。元刊本「紫雲亭」第一折【賞花時・幺】「也難奈何俺那六臂那吒般狠柳青。我唱的那七國裏龐涓也沒這短命。則是箇八怪洞裏愛錢精」。
- ・劫鏹—金に執着する。「鏹」は錢のこと。『行院聲嗽・珍寶』
- ・鈔、慢地。使鈔、辨慢。「慢」即「鏹」。
- ・口含錢—死者の口に含ませた銅錢のこと。『周禮・大宰』の

「大喪、贊贈玉、含玉」に付された鄭玄注には「含玉、死者口實。天子以玉」とある。宋・衛湜撰『禮記集說』卷二十「檀弓下第四」：「則卿大夫用珠也、士用具三」。鄭廷玉元刊本「看錢奴」第四折【收尾煞】「只爲折陪口含錢、干折了拖麻拽布子」。

・動不動一口語。ややもすれば。元刊本「遇上皇」【天下樂】に「又不曾遊手好閒廝定當。動不動要手模、是是取招狀。欺負煞受饑寒窮射糧」とある。

・鳴珂巷・麗春園・鶯花寨—雜劇や散曲において妓女の住處「妓樓」を指す常語。

〔譯〕

ひねくれたお鴿母さんは、食べ物をもさぼる「餓鬼」、金に執着する化け物のよう。わずかな「口含錢」でも必死に争う、ややもすれば命も惜しまない。「鳴珂巷」の中でかの蘇卿を死ぬまで監視し、「麗春園」の中で雙漸の鳥流しを決めてしまう。周到な待ち伏せを「鶯花寨」の中に用意して、旗をあげて勝負することになれば、誰がこのお鴿母さんを相手に張り合えるだろうか。

本作品は散曲や雜劇に頻見される妓樓を取り仕切る「鴿母」、いわゆる「やり手婆」を扱う。短い小令の中で、「枉乖柳青」「劫鏹妖精」「口含錢」「做死的」「動不動」「但く誰敢く」など、口語的な言い回しが多用されていることは一目瞭然である。

作品中に見える小卿（即ち蘇卿）と雙生（即ち雙漸）の名から、ある有名な妓女の物語が本曲の背景に一種の「見立て」として仕込まれて

いることがわかる。その「見立て」となった物語とは「販茶船」である。

妓女蘇卿と書生雙漸を主人公とする雜劇「販茶船」は、『録鬼簿』に王實甫「蘇小卿月夜販茶船」、紀君祥「販茶船」、無名氏「豫章城人月兩團圓」と一作ずつ著録されているが、残念ながら、明代の曲選集に見える殘曲しか今日には殘されていない<sup>3)</sup>。完全な形を持つテキストがないため、元代に流行したこの雜劇の實態を具體的に知ることはほとんど不可能だが、先行研究によって知られる「販茶船」の梗概を以下に示しておく<sup>5)</sup>。

廬州の妓女蘇小卿は、書生の雙漸と戀仲であった。雙漸が科擧に出かけた長い間に、小卿は操を守り、ほかの客を相手にしなかつた。そこで貧乏書生の雙漸を嫌う妓樓の「やり手婆」は、ひそかに計略をたてて彼女を茶商人の馮魁に賣り渡した。舟に乗って茶商の故郷へ歸る途中、小卿は雙漸のことを思い、琵琶を弾き、金山寺を通りかかったところで、寺院の壁に示す以下の詩を書き残した。

憶昔當年折鳳凰	憶えば昔當年の鳳凰は折かれ
至今消息兩茫茫	今に至るも消息は兩つながら茫茫たり
蓋棺不爲橫金婦	棺を蓋するも金を横る婦とはならず
入地當尋折桂郎	地に入るも桂を折る郎を尋ぬ當し
彭澤曉煙迷宿夢	彭澤の曉煙 宿夢に迷い
瀟湘夜雨斷愁腸	瀟湘の夜雨 愁腸を斷つ
新詩寫記金山寺	新詩 金山寺に寫し記し
高掛雲帆上豫章	高く雲帆を掛けて豫章に上る

後に雙漸は出世し、小卿を奪い返して夫婦となった。

「販茶船」は「書生と妓女の戀愛」の典型として、「書生と良家の娘の戀愛」を代表する「西廂記」とともに、元代の戀愛雜劇の二つ大きな流れをなしていた。<sup>6)</sup>元雜劇や散曲が妓女の戀愛を描く場合、この「販茶船」に登場する人物や地名・情節を下敷きにして、ある「見立て」の中でその戀を描いたのである。

この「見立て」とは要するに、「販茶船」に出てくる登場人物たちをある種の代名詞として用いることによつて、妓樓における人間關係を「販茶船」の類型にしたがつて描こうとするものであったが、右の作品にあつても「雙生」と「小卿」という名前が使われることによつて、作中の妓女と客とは戀仲で、二人の戀を邪魔する「やり手婆」が妓女の「母」として君臨する、という構圖が暗黙のうちに形成されているのである。

曲の前半が單刀直入に述べるのは「やり手婆」の金への執着心である。「やり手婆」を「娘」とは呼ばず「柳青」というのは、ある種の嫌惡感を漂わせるだろう。「貪食餓鬼、劫鍔妖精」の句にいう「餓鬼」（「餓鬼道」に落ちた飢渴の苦しみにあえぐ亡者）と「妖精」（魔物、化け物）とは、「やり手婆」の貪欲さを表現する。彼女は、「口含錢」と呼ばれる死者の口に含ませる一枚か二枚ほどの銅錢までも、必死に奪い取ろうとする。同義の動詞と名詞が交互に組み合わさつて出來た四字熟語「捨命亡生（生命までも捨ててしまう）」は、「やり手婆」の姿をより一層引き立たせている。

曲後半になると、妓女戀愛物語の主人公―小卿と雙生―が登場する。「鳴珂巷里幽囚殺小卿」とは、「やり手婆」が妓女蘇卿を死ぬまで

手放そうとしないことをいい、「麗春園里迭配了雙生」とは、蘇卿の戀人、貧乏書生の雙漸を妓樓から遠く追ひ拂うことをいう。妓女と客に對する「やり手婆」のこのやり方は、妓女の戀愛を描く雜劇によく見られる常套手段である。

末尾、「鶯花寨埋伏的硬。但開旗決贏。誰敢共俺娘爭」の三句は、最も注目し値するところであろう。軍營を意味する「寨」、戰略としての待ち伏せを意味する「埋伏」、ずらりと旗が立ち並び、決戦の陣を想起させる「開旗決贏」などは、紛れもなく戦いを意識して用いられた比喻表現であり、妓樓で行われた「やり手婆」の手練手管を描く本曲の中心部分である。

もう一曲、妓樓という「戰場」で懸命に戦う「やり手婆」の姿を再現した作品を見てみよう。同じく『樂府新聲』卷中「滿庭芳」條にある曲である。

牙恰母親。吹回楚雨、喝退湘雲。把麗春園扭做了迷魂陣。交別人進退无門。心惡義偏毒最（狼）（狼）。性搗搜少喜多嗔。百般的都難親近。除是鄧通錢幾文。便醫治了俺娘眼。

〔語注〕

・牙恰―『行院聲嗽・人事』には「利害、牙恰」と見える。また、「訝掐」とも作る。『朝野新聲太平樂府』（『四部叢刊初編』所收）卷七【大石調】「青杏子」馬致遠「悟迷」套數【播鼓體】曲に「也不怕薄母放訝掐、語知得性格兒從來織下」とある。

・迷魂陣―妓樓全體を比喻する語。當時流行つた平話文學作品に見られる兵法として語られた「八卦陣」などの類をもじつた言葉であろう。

・搗搜―「凶狠、頑固」の意。『董解元西廂記諸宮調』卷三「老夫人做事搗搜相、做箇老人家說謊」。張相『詩詞曲語詞匯釋』（以下『匯釋』と略す）参照。

・鄧通錢―お金のこと。晉・常璩『華陽國志・蜀志』「漢文帝時、以鐵銅賜侍郎鄧通、通假民卓王孫、歲取千疋。故王孫貨累巨萬億、鄧通錢亦盡天下」。

〔譯〕

むごいお鴛母さんは、巫山の神女が降らせる雨も上がらせ、湘地の雲も怒鳴つて散らしてしまうほどすごい人で、華やかな麗春園をむぎむぎと「迷魂の陣」に變えて男を陥れる。心根は悪辣で、そのあくどさはと言えば天下一。生まれつきのいこじで、機嫌のいい時はほとんどなく、怒つてばかり。なんとも親みにくいひと。鄧通の幾銭かの金が母さんの依怙地を治せるだけ。

冒頭に紹介した「滿庭芳」と同様、本作も妓女の口調を借りた代言體を探り、「やり手婆」の手練手管のあくどさを描く。「魂を迷わす陣」とは、「やり手婆」が金を巻き上げる相手、即ち廓の客のために仕掛けたわなである。ここでは「扭（ねじる）」という口語的な表現が實に效果的に用いられている。「吹回楚雨、喝退湘雲」の二句は、男女の情事を意味する「雲雨」をもじつた表現であり、「吹回（吹き返す）」「喝退（どなって退ける）」という「嘴（くち）」に關わる言葉が使われることによつて、「やり手」の「口のおそろしさ」が巧みに示される。また、「牙恰」も同様で、この語は「語注」に示したように、「廓の隱語」であるが、「やり手」の「利害」が「牙」という言葉で示されるのは、彼女の性格以上に「口」が「利害」であることが示され

ているように思われる。

## 二 戦いに喩えられた戀愛

さて、前節で見たのは、妓女の戀愛物語を背景に、妓樓という戦場で客を相手にした「やり手婆」の戦いぶりであった。しかし、次の作品に見られるのは、今まで論じたのと多少異なる「戦い」である。

### 題情

【中呂宮・粉蝶兒】這些時意懶心慵。悶懣懣似癡如夢。想當初倚翠偎紅。我風流、他俊雅、恩深情重。他生的剔透玲瓏。語容和言談出來。

【醉春風】他生的粉臉似秋蓮、春纖如嫩笋。鞋弓襪小步輕盈。更。能歌善詠。雁柱輕移、冰弦款撥、便是那鐵石人也心動。

【紅綉鞋】指望待要湖山畔乘鸞跨鳳。誰承望陽臺上雲雨無踪。則我這口中言都當作耳邊風。冷落了蜂媒蝶使、稀疎了燕侶鶯朋。多應是攪閑人將話兒哄。

【別銀燈】俏冤家風流萬種。他也學七擒七縱。把我作勤兒般推磨相調弄。我這里假粧癡件件依從。又則怕傷了和氣、觸着芙蓉。假和真你心裏自忖。

【蔓菁菜】你常好是不知輕重。動不動皺了眉峰。冰霜般面扇。若是箇村約的和你兩箇乍相逢。他把你那半世兒清名送。

……

【道合】離恨匆匆。離恨匆匆。天涯咫尺不相逢。覓鱗鴻。杳無踪。……恨蹙眉峰。愁積心中。怨恨無窮。何時得、玉環合、金釵換、金釵換對換對上青銅。

## 〔語注〕

・別透玲瓏―「玲瓏別透」とも書く。雙聲語の組み合わせ。賢いさま。關漢卿「救風塵」第二折【浪裏來煞】に「你廝愛女娘的心見的便似驢共狗。賣弄他玲瓏別透」とある。吉川幸次郎氏が「元曲選釋」では「玲瓏別透、慧也」と注した。

・攪閑人・哄―「攪」はかき回す。「攪閑人」は不詳。暇を持てあまして噂話を持ちかけるひとのことか。罵語かもしれない。「哄」は騙す、言いくるめる。

・推磨―ひき臼をまわす。轉じて「いいかげんにあしらう、難儀する」の意。一種の隱語であろう。元・張可久小令「妓怨」に「赤緊地板障婆婆。水性嬌娥。愛他推磨小哥哥」とある。

・冤家―元はかたきのこと。ここでは「憎いと思いつながらもいとしい人」の意。戀人に對する愛稱である。『匯釋』參照

・勤兒―遊郭に出入りする男のこと。『南詞紋錄』に「勤兒、言其勤於悅色、不憚煩也」とある。

・假粧癡―「假」、「粧」はともにふりをする、装う、の意。

「癡」は愚か、間抜け。「粧癡」は、愚かなふりを装う。「假粧癡」はわざと間抜けのふりをするを譯をつけた。

・觸着―「怒らせる」の意。元・朱凱「昊天塔」（『元曲選』收）第四折【雙調・新水令】に「歸來余醉未曾醒。但觸着我這秃爺爺沒些干淨」とある。

・村約的―雙聲語。「村胄」とも書く。「村」は俗、やほの意。「俊」「雅」の反對である。また、罵語として「下劣、あくどい」の意もある。「紂」は「村」と同義で、二音節にして罵語として「惡質」の意をなす。『匯釋』參照。

## 〔譯〕

【中呂宮・粉蝶兒】このごろは意氣消沈、うつうつとほうけてばうつとしてばかり。妓樓遊びに耽つたあの頃を思えば、私は粹で彼女は素敵で、二人の仲は睦まじかった。賢い彼女は、容姿も話も群を抜く。【醉春風】かんばせは秋の蓮の花のよう、指は生えただかりの筈そのもの、小さい脚の動きは軽やか、そのうえ歌も詩詠も上手。琴や琵琶などを手にかければ、冷血漢でも心を動かされる。【紅綉鞋】夫婦の契りを結ぶことを望むが、誰が願おうか捨てられることなど。私の言うことは馬耳東風、かつての戀の使いはすっかり用なしになってしまった。きつと、どこかの邪魔者にそそのかされたに違いない。【別銀燈】愛しい人は言い盡くせない風流さ。彼女も（諸葛孔明の）七擒七縱をマネして、この私をただの遊び人としてもあそぶ。わざと間抜けなふりをして言うことに従い、仲むつまじい間柄を損ねて彼女を怒らせることを恐れるのみ。眞か嘘かはお前だつて考えてみておくれ。【蔓菁菜】いつだつてお前は分別のつかない人。眉を擡めてご機嫌斜め、冷たくあたる。もしも野暮なあんちゃんが相手となつたら、お前の清らかな人柄が臺無しにされる。……【道合】恨むのは、あわただしい別れ。恨むのは、あわただしい別れ。遠くにいても近くにいても巡り會うことなく、傳書の雁や鯉はいずこ。……恨みで眉をよせ、愁いが心に積もり、盡きないのは恨みだけ。いつできるだろうか、玉環が円になり、金釵が對となつて、金釵が對となつてあなたと二人で鏡に映るのは。

これは明代の散曲集『盛世新聲』（編者未詳、正徳十二年1517年刊

行)『詞林摘艶』(張祿編、嘉靖四年1525年刊行)『雍熙樂府』(郭勛編、嘉靖四十五年1556年刊行)に収録された元の散曲作品である。<sup>(8)</sup>『詞林摘艶』は「題情」、『雍熙樂府』は「離思」を小題とする。

最初の三曲【粉蝶兒】【醉春風】【紅綉鞋】は男性の綿々たる戀慕の情を詠うが、第四曲【剔銀燈】の「他也學七擒七縱。把我作勤兒般推磨相調弄」とは、妓女の戀のかけひきを「戦い」にたとえたものであろう。

「七擒七縱」という言葉は、諸葛孔明の故事に由来する。<sup>(9)</sup>南方の蠻族の王・孟獲との戦に際し、諸葛孔明が七回孟獲を生け捕りにし七回釋放したことによつて、孟獲が心より感服し、歸順したという、あの有名な逸話である。

この套數において、諸葛孔明のように「擒」或いは「縱」するのはむろん妓女であり、孟獲のように捕えられたり放されたりしているのは遊郭を訪れる「私」である。妓女は自分に熱をあげる男を、氣分次第で呼び寄せたり突き放したりする。男は妓女のわがままにもどかしがりながらも、ついついそれを許してしまい、妓女の思い通りに動かされていく。戀のかけひきにおいては、諸葛孔明に對する孟獲のように、男は完全なる敗者である。本曲には、妓女に對する戀慕を交えて、戀のかけひきに勝てない男のじれったさが描かれている。

また、同じく『樂府新聲』巻中に収録された「喩敵」(雙調・【水仙子】と、楊朝英編『樂府新編陽春白雪』<sup>(10)</sup>後集巻五に収録された無名氏の套數雙調・新水令【駐馬聽】)においても、戀愛が男の立場から戦いに喩えて描かれている。

【水仙子】軍多將廣有埋伏。得勝姨夫且占取。捲旗旛到褪咽喉

路。不節鑼不搗鼓。權做箇詐敗佯輸。等得你不來不去。心足意足。那其間再做箇姨夫。

〔語注〕

・咽喉路——「咽喉」は「のど元の重地」の意。「咽喉路」は、ここでは「要害の地に逃げ込むルート」をいう。戦陣における作戦に關わる言葉と思われる。

・姨夫——宋・周密『癸辛雜識續集・姨夫眼眶』に「蓋北人以兩男子共狎一妓、則呼爲姨夫」という。『西廂記』第五本第四折「紅娘呵你服侍箇煙薰貓兒的姐夫。張生呵你撞著箇水浸老鼠的姨夫」の王季思校注に、「鶯鶯既別無姊妹、則此處稱鄭恆爲姨夫、顯係借勾欄習語打諢」とある。

〔譯〕

【水仙子】「軍」も「將」も多く待ち伏せて、勝った「姨夫」だけが(妓樓を)獨占できる。(敗れたならば)旗を巻き收め、「咽喉路」に引き下がる。(引き上げる)ドラもならさなければ(出撃の)太鼓も打たず、ひとまず負けとしよう。來ることもなければ行くこともなく、(あの客と妓女が)飽きる時を待とう。そうなつたら(俺が)「姨夫」になつてあげよう。

この作品にあつては、妓女をめぐる客同士のかけひき、あらそいが「戦争」にたとえられている。が、後半にいう「不節鑼不搗鼓」は、戀敵に敗れたふりをして妓女に戦いを挑まないことを恐らく述べるのであり、その意味では、廓における戀のかけひきを戀敵や妓女との三つ巴の戦いとしているのである。

また、次に【駐馬聽】を見てみよう。

【駐馬聽】錦陣裏爭先。緊捲旗幡不再展。花營中挑戰。牢拴意馬與心猿。降書執寫納君前。唇鎗舌劍難施展。參破脫空禪。早抽頭索甚他人勸。

〔語注〕

・意馬心猿―「心猿意馬」と同じ。四字熟語。「心猿」は佛敎語。心の欲を制したいことを猿がわめき騒ぐのになたとえていった語。『敦煌變文集・維摩詰經講經文』に「卓定深沉莫測量、心猿意馬罷癡狂」とある。元刊本「竹葉舟」【混江龍】曲に「子把心猿意馬牢拴住。一任交星移物換、石爛桑枯」とある。

・參破脫空禪―參禪は佛敎語で、禪を學ぶこと。「參破」すなわち「參透」、見通す、看破する、の意。「脫空」は「偽り、御破算になる」の意。宋・陶穀『清異錄』卷下「大小脫空」條「長安人物繁、習俗侈。喪葬陳拽寓像、其表以綾絹金銀者曰大脫空、楮外而設色者曰小脫空」。ここでは、仏敎に譬えて、妓樓遊びが實を結ばないことを見破ったことをいうであろう。

〔譯〕

【駐馬聽】花街で先頭を争うことなんかもうするまい、旗をしまいいこみ廣げるまい。遊郭で戦いの楯を飛ばすなどもうやるまい、浮ついた遊び心をしっかりとつなぎ止める。降参状をしたため君に差し上げ、するどい辯舌も振るゝ難い。うそ偽りの花街遊びを見抜き、早いうちに身を引くべきで、人に説得されるまでもあるまい。

「降書執寫納君前」にいう「君」が、妓女を指すことは明らかだろう。降参状を妓女に差し出すというので、ここでも戦いの相手は妓女なのである。

では、立場を替えて、當の妓女は妓樓を訪れてきた男との戀をどう見ているのだろうか。下に引用した關漢卿の雜劇「杜蕊娘智賞金線池」(略稱「金線池」)第三折の二曲を見てみよう<sup>1)</sup>。本雜劇については、かつて京都大學人文科學研究所の研究班が極めて優れた注を付けているので、その注をもとにして以下の部分を見てみよう<sup>2)</sup>。

【中呂・粉蝶兒】明知道書生。教門兒負心短命。盡教他海角飄零。沒來由強風情。剛可喜、男婚女聘。往常我千戰千贏。透風處使心作幸。

【醉春風】能照顧眼前坑。不堤防腦後井。人跟前不恁的喫場撲騰。呆賤人幾時能勾醒。醒。雖是今番、係于宿世、事關前定。

〔語注〕

・教門兒負心短命―『元曲選釋』は次のようにいう、「言以負心短命爲其教門、是彼書生之常態。故我任其飄零而不顧耳。海角飄零、習語。雲窗夢劇、自古多薄命、天涯流落、海角飄零」。

・「沒來由・剛風情」以下―『元曲選釋』は次のようにいう、「又本昔日之事。事之唐突而來、謂之沒來由。姻緣出於勉強、謂之強風情。姻緣之來、雖是唐突勉強、將得男婚女聘、亦可喜矣。其喜未久、遂復失之、故曰剛。剛、纔也。往常我以下、懊恨之辭。往常之我、千戰千贏。今乃敗露、止得使心作倖而已。用武而生破綻、謂之透風。使心、用心也。作倖、傲倖也。玉鏡臺劇、卻爲他皓齒明眸。不由我使心作倖。孟氏評曰、衷腸縷

縷、越罵越覺其懇至」。

〔譯〕

【中呂・粉蝶兒】はなから知つてゐる、「書生」というものは、みな讀書人稼業の死にぞこないで浮氣者。あんな奴、どこへでも行つてしまふほうがいい。やぶから棒にあたしに言い寄つてきて。あら嬉しや結婚するのかと思いきや（いなくなつてしまつた。戀の戦場で百戦錬磨のこのあたし、いつもだつたら相手にわざとすきをみせ、まんまと得を取つてみせるけれど。

【醉春風】「目の前の仕掛は避けられるが、後ろのワナには用心できぬ」というもの。人前でひどい目に遭わなきや、愚かなあたしはいつ氣づくだろう。目が醒めたわ。今生の出来事とはいえ、宿世の因縁に關わり、前世の定めそのもの。

雜劇「金線池」のあらすじはこうである。

貧乏書生韓輔臣は友人濟南府尹石好問が催した宴席で、妓女杜蕊娘に一目惚れして、妓樓に住み込むことになる（楔子）。杜蕊娘と韓輔臣はすっかり意氣投合して結婚することを誓うが、花魁である杜蕊娘を手放したくない「やり手婆」は、彼女の結婚に反對する。このことをめぐつて杜蕊娘は「やり手婆」と大喧嘩する（第一折）。石好問は任期を終え、濟南を離れることになると、經濟的な援助を失つた韓輔臣はどうとう「やり手婆」に妓樓から追い出されてしまふ。戀人の杜蕊娘を心配して韓輔臣は妓樓に忍び込むが、「やり手婆」から聞かれた彼の浮氣話を信じ込んだ杜蕊娘は、無情にも彼を追い返す（第二折）。再度濟南府尹に任命

された石好問は濟南に戻る。韓輔臣は、杜蕊娘との復縁をとりなおしてくるよう彼に頼む。その依頼を承け、石好問は金を出して金線池という名勝の地で二人の和解の宴を開くが、誤解が解けずにいる杜蕊娘は、韓輔臣を思いながらもどうしても彼を許すことができず、途中で宴席を後にする（第三折）。石好問は口實を設けて杜蕊娘を拘束して罪を問うふりをする。仕方なく杜蕊娘は韓輔臣にもみ消しを頼むが、韓輔臣は斡旋する代わりに自分との結婚を條件に出す。それを承諾した杜蕊娘は、石好問の援助のもとで、韓輔臣とめでたく結婚する（第四折）。

梗概からも分かるように、「金線池」は、妓女の戀愛物語として、男性の戀仇が登場することもなく、妓女と男のやりとりをめぐるプロットを中心とした、類型からやや外れた作品である。右に引用した曲は、ヒロイン杜蕊娘が「やり手婆」の嘘を信じ、戀人韓輔臣に裏切られたと勘違いした時のセリフである。意中の男と巡り會い、戀に落ち、結婚まで夢見た妓女が、戀人が他の女と懇ろになつてゐるといふ噂を聞き、かつての男性とのかけひきにおける「千戦千贏」のことを思い出し、今の男に眞心を捧げたことを、「能照顧眼前坑。不堤防腦後井」と悔しがる。男との戀は油斷大敵の「戦い」であると、妓女の口から明瞭に述べられている。このように、妓樓における戀のかけひきは、妓女にとつても「戦い」だったのである。

### 三 明代の作品について

明代の散曲集『雍熙樂府』には、若者の廓遊びを諷める「子弟收心」という主題の散曲套數が多く見られ、妓樓を戦場に見立てて戀愛



を戦いに喩える表現が明代散曲に受け継がれていることが確認できる。幾つか明代散曲の例を挙げておく。

#### 子弟退省

〔雍熙樂府〕卷四（仙呂宮・點絳脣）「半生着迷」套

【油葫蘆】他便是箇塗眉畫眼啜人賊。便有多能多會多謀智。逃不出一擒一縱牢籠計。

【那吒令】你便有七步才、他定下千條計。

【尾聲】他便有千般俊美。更與俺十分情意。也則索望風拱手納降旗。

【油葫蘆】彼女はおめかしをして、人を食らう「賊」だ。たとえ多藝多才の智謀家であつても、捕まえては放す「牢籠の計」から逃げ出せまい。【那吒令】曹植のごとき「七歩の才」があつたとしても、彼女は百方手を盡くす。【尾聲】彼女はどんなに麗しく、十分に心を盡くしてくれたとしても、こちらはただ風を慕つて旗をしまい恭しく降参するのみ。

#### 子弟收心

〔雍熙樂府〕卷四（仙呂宮・點絳脣）「花面金剛」套

【後庭花】我再不捨命撞迷魂陣、怕的是風流劍下亡。想著翠紅鄉女娘每一箇箇雄壯。他慣埋伏有智量。子弟每都受降。急回頭都中傷。腦後炮怎的防。

【後庭花】「迷魂の陣」に飛び込み命を捨てるなど、もう二度とするものか、恐れるのは「風流の劍」の下で命を落とすこと。思えば廓の女郎たちは一人一人勇ましく、待ち伏せに慣れて頓智に

富み、子弟たちは悉く降参するしかない。急いで踵を返そうとしてつて、とつくに手遅れ、後方の砲撃はどうして防げよう。

#### 子弟收心

〔雍熙樂府〕卷六（中呂宮・粉蝶兒）「今日才知」套

【二煞】緊的栽花人使道術、賣花人用見識。探花人不解拖刀計。傳書寄簡别人心膽。剪髮燃香剝人頂皮。敢將你腦骨也都敲碎。

【尾聲】常言道野村酒知滋味。再休做鶯花寨兒裏鬼。

【二煞】まことに「花を育てる人」は術を使い、「花を賣る人」はたくらみを用い、「花を尋ねる人」は「拖刀の計」だと悟らず。書簡の往來は人の心を抉るようなことを狙い、髪を剪り線香をたいて愛を誓うのは人の皮をてっぺんから剥がすようなもの、頭蓋骨までも叩き割られる。【尾聲】「たかが知れた味わい、野の花や村の酒」と諺にいう。金輪際花街に足を踏み入れるまい。

以上、明代の散曲にあつても、廓とは命をかけた「戦い」の場だつたのである。したがつて、遊冶郎たちが改心をして廓通いをやめる決心をした時、彼らはそれを「戰場から身を引く」、「劍の下から逃げ」と表現したのである。

#### 四 詞に於ける戀のかけひき

元代以後の曲文學は、このように、廓には戀のかけひきを一種の「戦い」として描いたが、では、曲文學が出現する前の詞において、戀愛はどのように描かれたのだろうか。戀のかけひきは「戦い」として描かれたのだろうか。

男女の戀愛が詩歌の中心的なテーマになったのは、文學史の上からは「詞」においてからであつたが、その「詞」においても、「男女の戀情」や「戀のかけひき」を描くのは極めてまれである。次に示す黃庭堅「歸田樂引」は、そうした例外中の例外で、「男の戀のかけひき」を描いた傑作である。<sup>(13)</sup>

歸田樂引 黃庭堅

對景還銷瘦。被箇人把人調戲、我也心兒有。憶我又喚我、見我、嗔我、天甚教怎生受。看承幸廝勾、又是尊前眉峰皺。是人驚怪、冤我忒攔就。拚了又舍了、一定是這回休了、及至相逢又依舊。

〔語注〕

- ・銷瘦―「銷」は「消」と同意で、消耗するの意。
- ・被箇人把人調戲―「箇人」は彼の人。「調戲」は、からかう、弄ぶ。

・天甚教人怎生受―「甚」は、まさに、眞に。「怎生」は「如何」「怎樣」の意。

・看承幸廝勾―「看承」は、「看待(もてなす、世話する)」の意。『匯釋』參照。柳永【擊梧桐】に「自識伊來、便好看承、會得妖嬈心素」とある。また、「廝勾」は、「相近(近付く)」、「相昵(親しむ)」の意。『匯釋』參照。なおこの句において、「看承」し、「廝勾」するのはともに男。

・是人驚怪―「是人」は、「人人」の意。『匯釋』參照。この一句で、「誰でも不思議に想うだろう」の意。

・冤我忒攔就―「冤」は、あだになる、の意。「忒」は強調の語。「攔就」は、「遷就(妥協する、讓歩する)」、「溫存(やさしく

いたわる)」の意。『匯釋』參照。晁端禮【點絳脣】に「攔就百般、終是心腸狠」、楊無咎【雨中花令】に「欠我溫存、少伊攔就、兩處懸懸地」とある。

〔譯〕

うららかな風光を前にし、また瘦せ衰えていく。かの女にはただ弄ばれるばかり。私にだつて心はあるものを。私を思い出せば私を呼び、私に會えば私をのしる。天よ、いったい私にどうしろと。

すっかり世話してやつてお前と懇意になろうとしたのに、當のお前はまた酒樽の前で眉をしかめている始末。何とも不思議だ。私がつりわけ優しくしたのがあだになったなんて。思い切つて、振り切つてしまおう、今度こそこの關係も必ず終わりで。(そういつでも)次に會えば、また前と同じ仲に戻るであろうが。

黃庭堅のこの「艷詞」は、女性への慕情の吐露するのでもなく、あるいは女性の優雅な姿を描寫するのでもない。俚語をまじえて妓女との戀のかけひきを描く異例の展開をもつ。妓女に翻弄された男性のもどかしさがあます所なく描かれているといつてよい。

清・李調元『雨村詞話』(唐圭璋編『詞話叢編』第二册所收 中華書局)

卷一は、黃庭堅のこの作品について次のようにいう。

山谷の詞は酷はなはだ曲に似る。【歸田樂】の「對景還消受。被箇人把人調戲、我也心兒有」と云うが如きなり。

山谷詞酷似曲、如歸田樂云、對景還消受。被箇人、把人調戲、我也心兒有。

李調元の「酷だ曲に似る」という評論は、難解な俗語の多用のほか、従来の閨怨とは全く異なつた、意中の女性に玩ばれた男の心中を赤裸々に披露するところに着目した發言であろう。

作品の表現に注目すれば、本作品と前章で取り上げた散曲套數「題情」が同じ内容を有することに氣付くだろう。たとえば、「歸田樂引」の「被箇人把人調戲、我也心兒有。憶我又喚我、見我、嗔我」と「又是尊前眉峰皺」の表現は、散曲「題情」の「他也學七擒七縱。把我作動兒般推磨相調弄」や「動不動皺了眉峰。冰霜般面扇」と同じ内容と言えるだろう。妓女のがままを許した男が、戀のかけひきにおいてつねに敗者という立場に立つ。黃詞は、戀する男を「女のがままに振り回される惨めな男」として描く点は元曲と同じなのだが、ただ、「戀のかけひき」が「戦い」として描かれたわけではない。元曲にあつては、「戀のかけひき」が「男女の戦い」であり、「戀した者」は「戦い」に敗れた「敗者」であつたが、黃詞には「廓は戦場である」とする「見立て」そのものがまだないといつてよいだろう。

ただし、廓を「戀を賣る場」と捉えて「やり手婆」を軍略家と描いた初期の元曲においては、恐らく「戀のかけひき」そのものを「戦い」とする意識はまだ充分には醸成されていなかったに違いない。

## 五 結び

妓女の戀愛を「戦い」にたとえる「見立て」は、近世的市民社會が次第に發展し、「遊郭」が大衆的な文學の舞臺となること、すなわち、戯曲や講談といった盛り場の文學が生まれ、それら盛り場の文學が「遊郭」を舞臺に物語を展開しはじめたことによつて始まつたので

はないだろうか。遊郭は「戀」を賣り買ひする「商賣の場」であり、「やり手婆」は妓女という「商品」を廓通いの客に賣りさばぎ、妓女は嘘の戀で客を引き留める。これら「戀の賣り買ひ」や「偽りの戀」が妓女を主人公とする戀愛物語の中心的な主題であることは言を俟たない。「賣り手」と「買ひ手」の「かけひき」は、次第に「戦い」として描かれ、したがつて戀を賣る場の廓は次第に「戦場」となる。元曲には、遊郭全體を戦場にたとえ、客と戦いを交わす「やり手婆」の手練手管を面白可笑しく描いた作品があるが、想像するに、それは恐らく、はじめは單に「やり手婆」の手練手管を面白おかしく描こうとして「戦争」の比喩を用いただけなのである。だが、元曲はやがて、戀を賣る妓女の本心さえも「戦略」の一種と捉え、妓女と客との「やり取り」「かけひき」を「戦い」の一部として描くようになったと思われる。これは、それまでの戀愛表現の定型を打ち破つたのみならず、戀愛に對する新しい認識の現れとして、それらの散曲を評價することができるようだが、それが社會全體のどのような變化と結びついているのかについては、今後の研究を待たねばならないだろう。

### 注

(一) 本論が考察する作品は、元雜劇或いは元代散曲集に収録されたものである。多くの散曲作品の創作背景や時期を特定することはほぼ不可能であるが、無名氏以外、考察出来る戦いの比喩を用いた作者の状況は大體次の通りである。

彭壽之、金朝貞祐興定年間(1214～1221年)の生まれだと考えられる。周德清は泰定元年(1324年)に『中原音韻』を完成した。1330年に『錄鬼簿』の初稿を完成した鍾嗣成が商政叔を「先輩已

死名公」と稱し、劉時中を「方今名公」とする。さらに鍾嗣成に「方今才人相知者」と稱された曾瑞卿は、中統初（1260年頃）の生まれだと考えられ、至正初（1321年頃）に歳は七十餘だと思われ、張小山と、至正五年（1345年）に亡くなった喬夢符は、後期元曲作者としてよく知られる。

以上の考察は、戯曲・散曲作家をより細かく分類した曹本『録鬼簿』と、孫楷第氏の『元曲家考略』（上海古籍出版社 1981年）を参照されたい。

(2) 編者・刊年ともに未詳。本論で挙げる作品は『四部叢刊三編』所收影元刻本テキストによる。

(3) 「鴛母」ともいう。唐・孫棨『北里誌』「海論三曲中事」が唐代の鴛母事情を記録している。以下に原文を示す。

平康里、入北門、東回三曲、即諸妓所居之聚也。妓之母、多假母也。亦妓之衰退者爲之、俗呼爲「爆炭」、不知其因。應以難姑息之故也。諸女：初教之歌令而責之、其賦甚急。微涉退怠、則鞭朴備至。皆冒假母姓。：諸母亦無夫、其未甚衰者、悉爲諸邸將輩主之、或私蓄侍寢者、亦不以夫禮待。：諸妓以出里艱難、：皆納其假母一緡、然後能出於里。其於他處、必因人而游、或約人與同行。則爲下婢、而納資於假母。

(4) 「販茶船」の殘曲「中呂宮・粉蝶兒」（這些時浪靜風恬套）十二曲は、俱に『詞林摘豔』『雍熙樂府』『盛世新聲』に收める。『北詞廣正譜』には十二曲の中の「鬪鶴鶉」一曲だけ収録し、「王實甫撰販茶船」と記している。

(5) 「販茶船」の物語について、田中謙二氏が論文「元人の戀愛劇に於ける二つの流れ」（『田中謙二著作集』第一卷 汲古書院 2000年）において、物語の概要を示したほか、張萬里氏と趙景深氏の指摘と考察があ

ることも言及している。本論はこれを参照した。

(6) 前注参考。

(7) 「迷魂陣」のほか、元曲に「迷魂寨」という用例も見られるが、「衙門」や悪人の「邸宅」の比喩として用いられている。妓樓のことを單に「寨兒」という呼び方も見られ、「鶯花寨」「迷魂寨」のどちらの略稱であるかは断定し難いが、「戦い」を匂わせた語彙であることに異議はなからう。なお、本論で言及した「牙恰母親」と「枉乖柳青」の二曲は、『樂府新聲』巻中「滿庭芳」二〇首連作の中に入っている。その連作の中に、鴛母を主題にしたものはこの二曲以外に十一曲が残っている。これは複数の作者の手によって文學サロンのような場所で競い合つて創作された連作であると考えられる。

(8) 『盛世新聲』『詞林摘豔』『彩筆情辭』は全文を、『九宮正始』及び『北詞廣正譜』は尾曲「道合」のみを収録している。『彩筆情辭』と『詞林摘豔』は、ともに作者を「元・楊景華」（未詳）としているが、『九宮正始』及び『北詞廣正譜』は、作者を「元・季子安」（未詳）としている。隋樹森氏の『雍熙樂府曲文作者考』では、『九宮正始』と『北詞廣正譜』が記録する季子安が、本套数の作者である可能性が高いとしているが、楊景華と季子安に關する考察に言及せず、判断の理由を説明していない。鄭騫『北曲新譜』は『詞林摘豔』に従い、作者を楊景華とする。本論では作者の考察に立ち入らないが、収録する散曲集を見る限り、いずれにしても本作品は元人のものであると斷言できる。作品の小題は『詞林摘豔』に従った。

(9) 元代には、白話小説『三國志演義』の前身である「三國志平話」の元刊本がすでに存在していた。元の英宗時代に出版された『至治新刊全相平話三國志』のテキストに、白抜きした「諸葛七擒孟獲」の小題が見られる。さらに「孔明七縱七擒」という標題の付いた版面が本葉の上に配

されている。日本内閣文庫所蔵の刊本を参照されたい。また、散曲に使われる「七擒七縱」は押韻の都合上文字を置き変えた結果である。

(10) 刊年未詳。貫雲石が序文を撰したので、貫氏の卒年1326年以前のも  
のと思われる。本論は1998年に浙江古籍出版社『歴代散曲彙纂』所収  
清・嘉靖十四年影鈔並び精校した元刻十卷本テキストによる。

(11) 本劇は古名家雜劇本、古雜劇本、元曲選本及び柳枝集本の四種ある  
が、本論は元曲選本によった。

(12) 『吉川幸次郎全集』22に収録された「元曲選釋第二集・杜蕊娘智賞金  
線池雜劇」を参照。

(13) 『中國文學のチチエローネー中國古典歌曲の世界』（大阪大學中國文學  
研究室編 汲古書院 2009年）「歌曲の二つの行方」第三部「歌曲と妓  
樓」に、妓樓における「本色」の歌曲として、秦觀の「滿園花」（一向  
沈吟久）と黃庭堅のこの作品を擧げて解説を加えている。谷口高志氏が  
執筆した本篇で、作品分析の眼目になる一段を引用するならば、次のよ  
うである。

妓樓に深くなじんだ作者が、そこで日常的に行われたであろう男女  
のやりとり、戀の駆け引きを踏まえて歌詞にしたためたものである  
う。……また、そこに描き出される女性像も、従來の閨怨詩（詞）  
のそれとは全く異なり、戀人に惡態をつき、感情の赴くままに男性  
を翻弄する、能動的で主體的な存在といえよう。作者は口語を自覺  
的に運用し、故意に下卑たことは遣いを用いることによって、戀の  
駆け引きや妓樓での男女のやりとりを實に活々と、生々しく描いた  
のである。

なお、本論における「歸田樂引」の譯文と語注は同書谷口氏のそれによ  
った。